王子様と

丹後　剛

　王子様は言いました。

「僕は去年、お父さんから地球をプレゼントしてもらったんだ。
最初は、とても面白かったよ。雷をたくさん落とすと、だんだん変なのができてきて、ひとりでに増えるようになった。それがある時気が付くと、いろんな形のになっていた。
そのうちに、仲間をとって食べるのが現れたんだ。ほんとうは、そいつを取り除きたかった。歯が気持ち悪かったし。でも何回やっても仲間をとって食べるのはでてきた。それに、そいつを取り除くと、今まで食べられてたのが、急に増えすぎちゃって、よく全滅しちゃった。だからもうあきらめた。そのうちに、空を飛ぶのが出てきたよ。はじめて、長いこととべた奴は、きっと得意だったと思うよ。無愛想な顔だったけど、嬉しそうにも見えたよ。」

羽狐は言いました。
「それは、雲まで飛べるの？」

「ああ、練習して雲まで飛べるようになった。」
「僕も、ちょっとは飛べるんだけど、長く飛べたら気持ちいいだろうな。」
「その頃から、体の大きなのがでてきたんだ。どこまで大きくなるかと思っていたら、ちょっと目を放した隙に、みんな絶滅した。」
「え？」
「食べ物もだんだんなくなって、みんな駄目になったよ。でも今度は、夜動き回っていた小さいのが、増えてきたよ。そこら辺まではよかったんだけど。」
「どうしたの」
「それから、少しして人間が現れた。変なものをつくっては、喧嘩をしながら地球のあちこちにあっという間に広がった。」

「人間か。」
「そう。」

「知ってるよ。人間は、いやだね。森を壊して、土を硬くしていくし、うるさい。とても嫌なにおいもするし、なんでも食べちゃう。火を使うね。」
「面白いものを作るんだけどね。」
「ああ、人間も飛ぶんでしょ。それにちらちらする光をずっと見つめているって。まぶしいのが好きなのかな。」
「いけないのは、人間はいつも後始末をしない。…汚しては、別の場所に移る。その繰り返しだ。もう、移る場所がないから、あちこちにこっそりごみを捨ててる。」
「それに何でも硬くしていく。僕はもっと柔らかいのがいいな。人間の住処には、仲間がほとんどいないし。人間から逃げ遅れた仲間は、みんな苦しそうだ。」

王子様は、決意を込めて言いました。
「だから、明日、人間を、減らそうと思う。」
「どうやって。」
「喧嘩をさせることもできるんだけど。。。」
「だけど？」
「きっと爆弾をつかって、地球を全部汚しちゃうからそれは駄目だね。」
「じゃあ？」
「人のいるところを凍らせてしまおうと思う。」
「人間、減るかな？」
「どうだろ。今日は、少しだけ冷やしてみるよ。」

翌朝、羽狐は、人間が雪や氷が増えたといって、騒いでいるのを見つけました。

王子様に報告すると王子様は言いました。
「かわいそうだけど、今日はもうちょっと温度を下げるぞ。」

翌朝、羽狐は、人間が雪や氷が増えたといって、騒いでいるのを見つけました。
王子様に報告すると王子様はいいました。
「もう、人間も心の準備はできたかな。今日はもうちょっと温度を下げよう。」
人間は、お互いにののしりあいながらまだ騒いでいます。

翌朝、羽狐は、人間が、お前が悪い、いや悪いのはお前だといって、騒いでいるのを見つけました。王子様に報告すると、王子様はいいました。
「今日は、昨日より温度を下げよう。」
人間は、地球のためにお前が何かしろ、いやお前が何かしろと言って騒いでいます。

翌朝、羽狐は、人間が喧嘩をはじめたのを見つけて、王子様に報告しました。
王子様は「じゃあ、爆弾を使うと危ないから、今日、人間の住んでいるところを凍らせてしまおう。」

そう言うと、王子様は町や村、都市を凍らせてしまいました。

人間の集まっていたところは、ほとんど凍り付きました。

しばらくすると、多くの人間が助けを求めて出てきました。

王子様は

「やれやれ、君たちは、しばらくここで我慢してくれたまえ、」というと、皆を月に載せました。

そのうちに、地球では、いろいろな生物が、いろいろに進化し、にぎやかになっていきました。

王子様と羽狐は、人間のことなど、すっかり忘れていました。

ある日、羽狐は、月がピカピカ光るので良く見ると、人間が月で争いごとを始めていました。
王子様にそれを教えると、王子様は、もう人間はいいやといって、月を太陽に向かって投げてしまいました。

太陽に向かう月の上で、人間は、気温が上がってきた、いや上がっていない、と議論しています。

月が金星の横を通る頃、さすがに誰もが、月が暑くなっていることを認めました。
でも、相変わらず、お前が何とかしろ、お前こそ何とかしろ、と言い合っています。

月が水星の横を通る頃、皆、自分たちがあまりにも愚かだったことに気付きました。
でも、気付くのが遅すぎました。

月の様子を見てきた羽狐が、王子様に報告しました。
「人間を載せた月、太陽に飲まれちゃった。」

「人間は、駄目だったね。」
「人間は、駄目だったね。」
「人間は、わかってないね。」
「人間は、わかってないね。」

「でも、面白いよ。」
「何が？」
「だって、ほら。」
王子様の指す方向を見ると、そこには、凍り付いた村で、協力しながら細々と生き抜いてきた一握りの人間達がいたのです。

「彼らは、助けてやった人間とは違うね。」
「そうだね。」

「これからどうなるんだろうね。」
「楽しみだね。」

王子様と羽狐は、少しその人間達の様子を観察することにしました。

おしまい。